

研究ノート

橋本左内における英雄観  
——蘭学者時代までの漢詩を中心として——

前 川 正 名

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第11号 抜刷  
2026年（令和8年）3月20日

研究ノート

橋本左内における英雄観  
——蘭学者時代までの漢詩を中心として——

前 川 正 名

**The Heroic View of Sanai Hashimoto, Focusing on  
His *Kanshi* up to His Period as a Rangaku Scholar**

MAEGAWA, Masana

Abstract

This paper examines the transformation of the heroic view held by Sanai Hashimoto, using as clues his evaluations of historical figures scattered throughout his *kanshi* (Japanese poetry written in Chinese). The heroic view referred to in this paper includes not only Sanai's references to historical figures, but also encompasses something close to personal aspirations by such as the ideals and goals in life that Sanai himself held. Chapter Two is a biography of Sanai Hashimoto. Chapter Three explains the materials used in this paper, including the division of time periods. Chapter Four examines the *kanshi* of each time period. This study covers *kanshi* written from Hashimoto's boyhood, when he first began composing poetry, through his period as a rangaku scholar.

*Keywords:* Sanai Hashimoto, Japanese *kanshi* poetry, heroic view, rangaku scholar, end of the Edo period

要 旨

本稿は、橋本左内による漢詩に散見する歴史的人物への評価等を手がかりに、彼の抱く英雄観の変遷を検討するものである。本稿でいう英雄観とは、左内の歴史的人物に対しての言及のみならず、左内自身が抱いていた人生の理想や目標といった個人的な願望に近いものも含まれる。

第二章は橋本左内の伝記である。第三章では本稿にて使用する資料について、時代の区分を含

めて解説した。第四章にて時代の区分にもとづいて、漢詩の検討をおこなった。本研究では詩作を始めた少年期から蘭学者時代までの漢詩を取り扱っている。

キーワード：橋本左内，日本漢詩，英雄観，蘭学者，幕末

## 目 次

- 一 先行研究
- 二 橋本左内略伝
- 三 橋本左内の漢詩（概観）
- 四 漢詩に見る英雄観
  - 1. 英雄とは何か
  - 2. 少年時代
  - 3. 適塾時代
  - 4. 蘭学者時代
- 五 橋本左内における英雄とは

### 一 先行研究

本稿は、橋本左内の漢詩中に散見する歴史的人物への評価等を主な手がかりとして、周辺資料等を参照しながら彼の抱く英雄観の変遷を検討するものである。ただし、ここで言う英雄観とは、先行研究に見られる「古今東西の英雄譚における英雄（の条件）」等とは少し異なる。無論、一般的に英雄と呼ばれる歴史的人物に対しての言及もあるのだが、左内自身が抱いていた人生の理想や目標といった個人的な願望に近いものも含まれるため、この点においてやや注意を要する（詳しくは四章参照）。

さて、この左内であるが、幕末の志士としてのみ論じられる傾向が見られ、それ以外の部分に触れられることがほぼなかった。一例を示すならば、本稿の検討資料の中核となる、彼による漢詩が、460首ほど（詳細後述）遺っていることはあまり知られていない。そのため、研究対象として取り上げられることもあまりなかった<sup>1)</sup>。

例えば『渡辺華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』（日本思想大系）に収録されている左内関係の資料は<sup>2)</sup>、意見書や書簡を主としており、漢詩は一首も収録されていない。この状況を踏まえ、筆者は2002年より、左内の全漢詩を対象に、分析（書き下し文、現代日本語訳の作成・作品解説を含む）を始めた<sup>3)</sup>。

もちろん、例えば『日本漢詩』（新釈漢文大系）には、辞世の句「獄中作」が採録されており<sup>4)</sup>、左内の漢詩が完全に無視されていたわけでもない。

では、その獄中作（全三首：448, 449, 450）を少し見てみよう。獄中作の一首目は冤罪で死なねばならぬことへの悔しさが溢れ出ている詩である。二首目は忠臣として死んだ文天祥と自分をなぞらえており、死への覚悟が明確に出てくるものである。そして最後の第三首目では、静けさに包まれた牢獄の窓に星の光が差し込む様を詠っており、平静さを取り戻し、完全に死を受け入れている状況である。二首目と三首目は死を受け入れている点では同じだが、二首目が己を鼓舞する感が強いのに対し、三首目はある種の諦観に近い。このたった三首を見るだけでも、印象は

全て異なる<sup>5)</sup>。しかし『日本漢詩』では、これら一連の詩のうち、当時志士の間で流行した文天祥の逸話（および彼の遺した「正気の歌」）を踏まえた、幕末の志士らしさが強調される二首目のみの採録となっている。「志士左内」としての最後を象徴する詩であり、「漢詩人左内」の詩として採録されたとは言い難い。

本稿にて検討するテーマもまた、志士のイメージを彷彿とさせるものではある。しかし、全詩を通して見ていくならば、「獄中作」の第二首を典型とする「志士左内」の印象とは、また異なる志士像が浮かび上がって来る。

次章にて触れるが、左内の一生を時期的に分類すると、適塾時代、蘭学者時代（福井在任期、江戸遊学期）、書院番時代（江戸往復期）、明道館時代（教育者期）、志士時代（前期、後期、謹慎期、入牢期）に分けられる。本稿ではこの時代区分を目安とし、蘭学者時代までの左内の漢詩を中心に、その他、周辺の資料にも目を配りつつ、彼が抱いていた英雄観に関して考察を加えていきたい。

## 二 橋本左内略伝

ここでは橋本左内の生涯に関して簡単に解説しておきたい<sup>6)</sup>。

左内は、天保五年（1834）、藩医の長男として越前福井城下に生まれた。名を綱紀、字を伯綱と言ひ、藜園、景岳などと号した。左内は通称である。七歳から学問に励み、八歳の時、藩儒の高野真斎について学んだ。十二歳（一説には十五歳）の時、同じく藩儒の吉田東篁の門に入った。また、この頃より、宋の岳飛を慕ひ、景岳と号した。

嘉永二年（1849）冬（十六歳）、大坂へ遊学し緒方洪庵の適塾に入り、蘭学と西洋医学を学んだ。三年後の嘉永五年（1852）閏二月（十九歳）、父の病気によって福井へ帰り藩医となる。安政元年（1854）二月（二十一歳）、今度は江戸に上り、杉田成卿の門に学んだ。この時期の左内はあくまで藩医であり、武士ではない。

その後、福井藩藩主・松平春嶽の側近であった鈴木主税の推挙を受け、安政二年（1855）七月（二十二歳）に帰国、十月に士分となり御書院番に抜擢される。これより藩政の改革にあたることになる。江戸と福井とを頻繁に往復している時期である。安政三年（1856）十月（二十三歳）、藩校・明道館（安政二年三月創建）の講師同様に心得、蘭学掛となり、さらに安政四年（1857）一月（二十四歳）、明道館の学監同様に心得となった。

同年八月、藩主の侍読兼御内用掛として江戸に上り、藩主の意向を受け一橋慶喜の擁立に奔走する。しかし、井伊直弼の政策と対立したため、安政五年（1858）十月（二十五歳）、謹慎を命ぜられる。安政六年（1859）十月（二十六歳）、安政の大獄に刑死した。

刑死しているため、政治活動家としての印象が強い左内であるが、当初（御書院番・明道館時代）は教育者としての起用であり、藩政の教育改革に従事している。これもまた志士と称してよい働きであるものの、一般に思い描く志士像とは少し距離があるだろう。後に政治活動に関わるが、その活動も、安政四年（1857）八月から、藩主・松平春嶽が謹慎処分を受ける安政五年（1858）七月までのわずか一年程度のことである。

## 三 橋本左内の漢詩（概観）

それでは次に左内の遺した漢詩について解説したい。

本稿の底本である『橋本景岳全集』に収録されている漢詩は、『景岳詩文集』の450首と少年時

代（適塾以前）の習作6首である。単純に計算するならば、456首となるのだが、『景岳詩文集』の137と142はほぼ同文の詩である<sup>7)</sup>。また、『景岳詩文集』の元となった資料の一つ『藜園遺草』（上巻115首・下巻116首）には、細かな字句の異同の他、『橋本景岳全集』に収録されていない2首が含まれる。さらに山口宗之氏による『全集未収橋本左内関係資料研究』に、江戸遊学期の漢詩と思われる10首が収録されている<sup>8)</sup>。真贋も含め、総数が定まっていない状況でもあり、あくまで「460首ほど」としておく。

その著作年代を時期毎に分けて年号（西暦）、橋本左内の年齢、作品番号、作品数の順に表にすると次のようになる<sup>9)</sup>。

なお、この「蘭学者時代」には二つの区分方法がある。一つは、「適塾に入門する嘉永二年（1849）冬より、安政四年（1857）八月二十日に江戸到着し、侍読兼御内用掛を命じられるまで」であり、これが「広義の蘭学者時代」である。この区分に従えば、適塾時代、蘭学者時代（狭義・後述）、書院番時代、明道館時代が全て蘭学者時代となる。

もう一つは、「広義の蘭学者時代」を、「適塾遊学期」「福井在住期」「江戸遊学期」「江戸往復期」「明道館在職期」に分類した際、「適塾遊学期」（塾生）を一つの時代区分とし、「福井在住期」「江戸遊学期」を「蘭学者時代」（藩医）として一つの時代区分とし、更に「江戸往復期」（書院番）と「明道館在職期」（教育者）を各々一つの時代とした際の、「狭義の蘭学者時代」である。本稿では、こちらの狭義の区分を用い、ここまでを検討対象とする。

適塾以前	嘉永二年（1849）冬以前 十五歳以前	漢詩番号少01～少06（6首）
適塾時代	嘉永二年（1849）冬以前～嘉永五年（1852）閏二月 年齢一六～十九歳	漢詩番号001～023（23首）
蘭学者時代	嘉永五年（1852）閏二月～安政二年（1855）十月	
福井在住期	嘉永五年（1852）閏二月～安政元年（1854）二月 年齢十九～二十一歳	漢詩番号024～064（41首）
江戸遊学期	安政元年（1854）二月～安政二年（1855）十月 年齢二十一～二十二歳	漢詩番号065～071（7首）
書院番時代 （江戸往復期）	安政二年（1855）十月～安政三年（1856）七月 年齢二十二～二十三歳	漢詩番号072～077（6首）
明道館時代 （教育者期）	安政三年（1856）七月～安政四年（1857）八月 年齢二十三～二十四歳	漢詩番号078～089（12首）
志士時代	安政四年（1857）八月～安政六年（1859）十月	
活動前期	安政四年（1857）八月～安政五年（1858）七月 年齢二十四～二十五歳	漢詩番号090～119（30首）
活動後期	安政五年（1858）七月～安政五年（1858）十月 年齢二十五歳	漢詩番号120～138（19首）

謹慎期	安政五年（1858）十月～安政六年（1859）十月 年齢二十五～二十六歳 漢詩番号139～445前後（約300首） <sup>10)</sup>
入牢期	安政六年（1859）十月二日～七日 年齢二十六歳 漢詩番号445前後～450（約5首）

#### 四 漢詩に見る英雄観

##### 1. 英雄とは何か

それでは、漢詩を見る前に、本稿のテーマである英雄観の英雄という言葉について簡単に整理をしておきたい。

『日本国語大辞典（第二版）』によれば<sup>11)</sup>、

知力や才能、または胆力、武勇などに特にすぐれていること。また、その人。

とある。これが一般的な日本語上の解釈であるが、もう少し踏み込んでいくなれば、英雄譚における英雄の条件、あるいは英雄の類型等もそれにあたる<sup>12)</sup>。神話等に顕著な半神半人系の特殊な生い立ちや、それに付随する超自然的な能力。折口信夫氏の「貴種流離譚」につながる要素、すなわち貴人の末裔が流浪し後に統治者となる。しかし、悲劇的な死を遂げる等々、幾つかのパターンが存在する。

先述の辞書上の英雄は、単に他者よりも優れていれば、それだけで英雄たりえるのに対し、英雄譚の英雄は、単に優れているだけではなく、自身に神性や、救世主的な要素や、悲劇性を持たねばならない。そこに違いがあるだろう。

では実際に左内の漢詩ではどうであろうか。志士時代活動後期までの左内の漢詩には、「英雄」という語そのものは138（本稿での検討対象外）に一度使われるだけである。その他、類語と考えられる「偉人」「傑物」「英傑」「豪傑」等も語彙としては存在しない。

そもそも、検討資料は漢詩であり、英雄論を専門に述べた文章でもないため、当然の結果と言える。しかし、左内が英雄について明確に述べていないからといって、彼がいかなる英雄像をも抱いていなかったと結論づけるならば、それもまた行き過ぎた文献実証主義と言うべき短絡的な考えである。

一例を述べるならば、二章「橋本左内略伝」にて述べたように、左内の号「景岳」は宋の岳飛に由来する。岳飛は南宋の武将で、金の侵攻を幾度となく撃退する。対金政策においては主戦派の代表格であり、そのため金との講話を進める宰相・秦檜と対立し、謀殺された。後代、救国の英雄として称えられた人物である。

先に述べたように、英雄の定義・条件・意味等、厳密に言い出せば際限が無いのであるが、単純に言って、岳飛の生き様は、左内にとって憧れを抱き、己の号に取り入れる程の人物であり、まさに英雄であった。しかし、この岳飛も101（本稿での検討対象外）にてようやく登場するだけである。

そこで本稿では、視点を広げ、左内が肯定的（あるいは否定的）評価を加えている人物だけではなく、左内自身が「こうありたい」「こうあるべきだ」と目標・理想を述べている記述等にも範囲を広げ、左内の心の奥に潜む英雄観を見ていくこととしたい。

## 2. 少年時代

そもそも習作に近い作品群のため、数が少ない。また、そこでは英雄に関する記述は見られず、むしろ、

少01 秋日山居	秋日山居
與木石居鹿豕遊	木石と居り鹿豕と遊び
夜眠破屋晝山頭	夜は破屋に眠り 昼は山頭
輕裘肥馬王侯貴	輕裘肥馬 王侯の貴きも
不若此身却自由	しかず 此の身の却って自由なるに

といった、無為自然、老莊思想にでも通じうる、まるで世捨て人の詩のような印象が強く出ている。上記の詩では本来、英雄に近い存在である「王侯」よりも<sup>13)</sup>、「自由な生活の方が勝っている」とうたう。少年が作った詩と言うよりは、人生の苦楽等々全てを通り過ぎ、世俗から離れ隠居した人物による詩のようである<sup>14)</sup>。

同時期の左内の著作としては、漢詩の他に『啓発録』があげられる。大きく五つの項目からなり、「去稚心」「振気」「立志」「勉学」「択交友」である。

『啓発録』を書いたのは、嘉永元年（1848）、大坂へ遊学する前年である。また、矢島立軒の序文と自跋をつけたのは、安政四年（1857）、侍読兼御内用掛として江戸に上る年である。以降、一橋慶喜の擁立のために奔走することになる。

いずれも、故郷越前を離れる直前のことである。つまり左内は、初めての遊学となる大坂行きと、政治活動を行なうための江戸行きといった、人生の一大転機とも言える時期に、『啓発録』に関する執筆を行なっている。漢詩以外の左内の思惟の変遷に関する周辺資料としては見逃せないものである。

内容を見ていくなれば、「振気」に、

今もし天下に事あらば、手柄功名はかへつて町人百姓より立て、福島左右衛門大夫・片桐助作・井伊直政・本多忠勝等がごとき者は、士よりは出で申さざるべきかと思はれ、誠に嘆かしく存ずる。

とあり、現在の武士達への批判とともに、手本とすべき対象として過去の武人達の名前が並ぶ。福島左右衛門大夫・片桐助作・井伊直政・本多忠勝は手柄や功名を立てた人物として認識されている<sup>15)</sup>。次に引く「立志」の記述と合わせて見ていくと、彼の思う英雄像がより明解となってくる。

侍に生まれて忠孝の心なき者はなし。忠孝の心これ有り候て、我が君は、御大事にて我が親は大切なる者と申す事、聊かにても合点ゆき候へば、必ず我が身を愛重して、何とぞ我こそ弓馬文学の道に達し、古代の聖賢君子・英雄豪傑の如く相成り、君の御為を働き、天下国家の御利益にも相成り候大業を起し、親の名までも揚げて、酔生夢死の者にはなるまじと、直ちに思ひ付き候者にて、これ即ち志の発する所なり。

「忠孝の心」を説くところから始まり、「弓馬文学の道」にて「古代の聖賢君子」や「英雄豪傑」のような存在となり、君主や「天下国家」のために働く。決して「酔生夢死の者」になってはい

けない、すなわち「ぼんやりと一生を過ごしてはならない」とする。そしてそのためには、しっかりと志を立てることが必要であると述べている。

さらに「勉学」の項では、

学と申すは、忠孝の筋と文武の業とより外にはこれ無く、君に忠を竭し親に孝を尽くすの真心を以て、文武の事を骨折り勉強致し、御治世の時には、御側に召使はれ候へば、君の御過ちを補ひ匡し、御徳を弥増に盛んになし奉り、御役人と成り候時は、その役所役所の事首尾能く取り修め、依怙鼻負致さず、賄賂請謁を受けず、公平廉直にして、その一局何れもその威に畏れ、その徳に懐き候程仕わざをなし申すべき義を、平生に心掛け居り、不幸にして乱世に逢ひ候はば、各々我が居場所の任を果して、寇賊を討平げ、禍乱を克ち定め申すべく、或ひは太刀槍の功名、組打の手柄致し、或ひは陣屋の中において、謀略を賛画して敵を壘にし、或は兵糧小荷駄の奉行となりて万兵の飢渴致さず、兵力の減らざるように心配致し候事など、かねがね修練致すべき義に候。

と、「忠孝」、「文武」を説くのは「立志」に同じいが、より具体的な行動の指針が記される。太平の世にて、側近となった時、役人となった時、それぞれの心掛けるべきことを述べる。一方、乱世の時は、前線に出た時、軍師となった時、後方支援をする時、それぞれの心掛けるべきことを述べる。「功名」や「手柄」といった、やや即物的な功績に関する表現が目につくのだが、先の『啓発録』の項目の一つ「立志」に出てくる「古代の聖賢君子」や「英雄豪傑」、より具体的には同じく『啓発録』の「振気」に出てくる戦国時代の武将のようになるには、どのようにしたら良いのか左内なりの具体的な行動を記したものである。

以上、簡単にまとめていくならば、英雄という言葉や類似の表現は漢詩において表現としては出てこない。その一方で、『啓発録』の文章と併せて見ていくならば、天下国家の役に立ちたいという思いや、具体的に思い描く理想とすべき人物像等が存在していたことが確認できるだろう。

### 3. 適塾時代

この時期においても、少年時代と同じくむしろ世捨て人のような、隠者の生活への憧れが見られる。次の引用は、適塾の塾生達と花見に出かけた時の詩であり、その二首目では、

012 又 又

(與適塾諸友遊櫻社 適塾の諸友と桜社に遊ぶ の2首目)

櫻社花開媚暖風	桜社花開きて暖風に媚び
斜陽映射萬株紅	斜陽映射す万株の紅
三間茅屋一瓢酒	三間の茅屋 一瓢の酒
左右吟詩老此中	左右吟詩 此の中に老ゆ <sup>16)</sup>

艶やかな風景を描き出しつつも、後半は「せまいあばら家に住み、わずかな酒しかない生活をしながらも」、「同僚とともに詩を吟ずる。こうした楽しみの中で年をとっていくのも悪くはないものだ」とうたう。

同様の詩は他にもあり、

018 身間伴白鷗 身間に白鷗を伴ふ  
窓對青山門瞰流 窓は青山に対し 門は流れを瞰る  
世塵疎處占清幽 世塵疎なる處 清幽を占む  
江村却是有良友 江村却って是れ良友有り  
日日投釣伴白鷗 日々釣を投げ白鷗を伴う

ここでは、前半で静かな書齋（住まい）を歌い上げ、後半では「田舎村ではかえって良い友達を得ることができ」、「毎日の釣りに、白いカモメが連れだっていて良い友達となっている」とする。適塾にて寝る間も惜しんで猛勉強をしていた時期の作とは思えない内容である。

当時の適塾とは、全国から英才達が集い、競い合っていた場所であり、左内自身も今でいう公費留学のような立場である。左内に限らず塾生達は、適塾での勉学が終われば国元へ戻り、藩の重要な立場となっていくことが約束された境遇であった。

また、左内が福井に戻るのは、嘉永六年（1853）のペリー来航の前年のことであるが、実際には天保年間（1831～1845）中頃から外国船の来訪が相次いでおり、海外情勢（外国との関係）に動きが生じ始めていた時期でもある。蘭学塾という性質上、西洋の事情には明るく<sup>17)</sup>、当然、適塾内でも塾生同士で天下国家について論じ合っていたと考えられる。しかしながら、そういったものに言及する詩は一切無く、また次の蘭学者時代より頻出する己の政治登用を願う詩も見られない。先に引いた隠遁生活への憧憬を、猛勉強への反動で詠んだものと捉えたとしても、不自然なまでに、ただ典雅で長閑な世界が練り広げられている。

#### 4. 蘭学者時代

ここでは、福井在任期と、江戸遊学期に分けて見ていきたい。福井在任は生粋の藩医として過ごしていた時期である。続く江戸遊学期も同じく藩医であるものの、国政の中心地と言える江戸に生活の拠点があり状況が異なるためである。

##### (1) 福井在任期

大坂・適塾から福井に帰郷後、父の病死（十月八日）により、嘉永五年（1852）十一月、藩命により家督を相続、医員に任じられる。この時期の左内は藩医として、東篁の母の乳癌の手術を担当したことや、蘭方医の笠原良策・半井仲庵・宮永良山等と蘭書の研究会を開き研鑽に努めたこと、種痘の普及に尽力したこと等が知られている。若手の蘭方医として縦横無尽の大活躍をしていたと言ってよい。しかし第三者的評価とは対照的に、左内自身は現状に不満を抱いていたようである。己の起用を願う政治的野心が垣間見える詩や、太志を述べる（現状への不満を表す）詩が現れ、同時に、こういった野心的な傾向と連動して英雄に関する言及が見られてくる時期である。

まず野心が垣間見える詩であるが、嘉永五年（1852）の詩に、

036 漁翁 漁翁  
東海往來鶴髮翁 東海往來す 鶴髮翁  
長竿垂釣坐茅中 長竿垂釣し 茅中に坐す  
飄然長伴閑鷗去 飄然として長に閑鷗を伴ひて去る  
不恨無人更卜熊 恨みず 人の更に熊を卜すること無きを

があり、末句に「熊をうらなう人は、いっこうに現われてこないが、それを残念がらずに待ってしよう。」とある。この詩は、『史記』「斉太公世家」の太公望の伝説にもとづいている。関連するところを摘記すれば、

太公望呂尚者、東海上人。(中略) 呂尚蓋嘗窮困、年老矣。以漁釣奸周西伯。西伯將出獵、卜之。曰所獲非龍非彫非虎非羆、所獲霸王之輔。於是周西伯獵。果遇太公於渭之陽。  
 (太公望呂尚は、東海の上の人なり。(中略) 呂尚は蓋し嘗つて窮困し、年老いたり。漁釣を以つて周の西伯に奸む。西伯將に出でて獵せんとし、之を卜す。曰く「獲る所は、龍に非ず、彫に非ず、虎に非ず、羆に非ず、獲る所は、霸王の輔なり」と。是に於いて周の西伯獵す。果たして太公に渭の陽に遇ふ。) <sup>18)</sup>

とある。つまり左内の詩における「熊をうらなう人」云々とは、私(左内)を政治の要職に登用してくれる人物に未だ出会えていないことを嘆いていると考えられる。

同様に嘉永六年(1853)の詩では、

045 呂望釣渭圖 呂望渭に釣るの図  
 避紂來居渭水頭 紂を避け來居す 渭水の頭(ほとり)  
 茅中兀座日垂鉤 茅中兀座し日び鉤を垂る  
 要知君意非魚鼈 知るを要す君が意魚鼈に非ざるを  
 請見東爲齊國侯 請う見よ 東して齊國侯となれるを

があり、題名から明らかなように「呂望」つまり己を太公望になぞらえおり、先の036の詩と同じく自身の起用の機会を願う詩である。

類例としては、

047 從軍行 從軍行  
 遠從將軍出塞關 遠く將軍に從つて塞關を出づ  
 年々苦戰隴雲間 年々苦戦す 隴雲の間  
 昨宵燈下書家信 昨宵灯下 家信を書く  
 未報君恩惡可還 未だ君恩に報はず 悪んぞ還るべけんや

があり、その末句において「まだ君主のご恩に報いるような成果があがっていないのに、どうして帰ることができようか」と述べ、

054 晩春 晩春  
 茅屋人稀晝亦扃 茅屋人稀れにして昼また扃(けい)す  
 先生門外柳青々 先生の門外 柳青々たり  
 風蝶逐芳頻亂舞 風蝶は芳を逐ひて頻りに乱舞し  
 雨蜂委地暫休翎 雨蜂は地に委ねて暫らく翎(れい)を休む  
 愁如花落拂還滿 愁ひは花落の如く払へども還た滿ち

春似水流駐不停 春は水流に似て駐むれども停らず  
好爲吟遊徒費日 好んで吟遊を爲し徒らに日を費す  
案頭常對聖賢經 案頭常に対す 聖賢の經

においては、尾聯（7・8句目）にて「私は詩歌をうたう楽しみが好きで、日々をむだに使っている」、「（将来に備えて）机の上には、儒教の經典があり、いつもそれと向きあっている」と、本当は、国家や社会のために役立つ活躍をしたいと願いつつも、未だ機会を得ない現状を嘆いている。

057 秋風 秋風

無端窗外起颯風 端無くも窗外颯風起こる  
偏怪蕭々落井桐 偏に怪しむ蕭々として井桐落つるを  
砧韻衣寒悲旅客 砧韻衣寒 旅客を悲しましめ  
月光秋淨悅詩翁 月光秋淨 詩翁を悦ばしむ  
一叢綠散橋邊柳 一叢綠散ず 橋邊の柳  
千樹紅飄嶺上楓 千樹紅飄る 嶺上の楓  
即使蓴鱸肥且旨 即ち蓴鱸をして肥へ且つ旨からしむ  
不須罷仕返江東 須いず 仕へを罷めて江東に返るを

では、尾聯（7・8句目）にて「この晩秋の季節は、蓴菜（じゅんさい）とスズキが肥えふとり旨くなる時である」、「しかし、（それを食するために）勤めをやめ故郷へ帰ろうとは思わない」とする。なぜ帰ることができないのか、それはすなわち、もっと大きな望み（天下国家のための大きな仕事をしたい）があるためと考えられる。

さらに、時流を踏まえた上で、詠み込まれた詩に以下がある。

062 冬晩偶作 冬晩の偶作

君恩未報且忝官 君恩未だ報いず且つ官を忝す  
每憶國難淚不乾 國難を憶ふ毎に涙乾かず  
偃臥病床苦無事 病床に偃臥して無事に苦しみ  
晒觀巨劍若氷寒 晒ひて觀れば巨劍氷の若く寒し

ここでは1句目にて「まだ君主の恩に應えるような仕事をしていないのに、その上公職を汚す身となっている」とし、2句目でも「現在のわが国に降りかかった災難を思うたびごとに、感情が昂ぶって涙が乾かない」と記す。類例は他にもあり、

063 歲晚述懷 今茲癸丑北地無雪，和煦如春  
歲晚述懷 今茲癸丑北地雪無し，和煦春の如し  
病身謝客鎖柴扉 病身客を謝し 柴扉を鎖す  
節漏春光草綠肥 節は春光を漏らし 草綠肥ゆ  
好鳥有知猶未至 好鳥知る有り 猶ほ未だ至らず  
庭楛差約稍將飛 庭楛約に差いて ようやく將に飛ばんとす  
明窗淨几 日び相ひ昵し

白石清泉夢亦稀	白石清泉 夢むことまた稀なり
雄志素期投筆事	雄志素より期す 投筆の事
今年二十意空違	今年二十意空しく違う

ここでは尾聯（7・8句目）にて「以前から、いざとなれば文筆を捨て軍事につこうと雄々しく決心していたが」、「今年二十歳になったにも拘わらず、願い虚しく病床にあり、志と違い残念である」と述べる。

062・063の詩に見られるように、左内は時折病によって床に伏すため、漢詩においても自身の体力が続かないことを嘆く。また当時の左内はあくまで藩医であり、国政（藩政）に対しては何も出来ない立場にすることが歯痒かったようである。これは、適塾時代の学生という立場から藩医という公職に就いた環境の変化も大きかったことと思われる。

なお062「冬晩偶作」の「国難」とはペリーの来航を指しており、福井在住期と激動の時代の幕開けの時期が重なっている。これらのことを併せて考えるならば、左内に内在する政治活動への参加の欲求が、次第に膨張していることが窺われよう。

なお、このような心情の中で

061 晩冬經長崎村	晩冬 長崎村を經（ふ）
陰雲漠々日將昏	陰雲漠々として日將に昏れんとす
聞説此間古迹存	聞くならく此の間古迹存すと
想起當年南北事	想起す当年南北の事
一行恨涙弔靈魂	一行の恨涙靈魂を弔す

があり、ここでは3句にて「その昔、南北朝時代のことを思い起こして」、続く4句にて「(つい流してしまった)一筋のくやし涙をもって、志半ばに倒れた武將のたましいを弔おう」とある。具体的な英雄を題材として取り上げた詩である。

長崎村とは、現在の福井県坂井市丸岡町長崎のことであり、そこには新田義貞の遺体を埋葬し墓石が立てられた称念寺がある。南北朝時代の武將・新田義貞（鎌倉幕府倒幕の立役者の一人。その後の足利尊氏との争いに敗れ福井で戦死）のことを弔う詩である。南北朝は、その正統性の問題、武將それぞれの評価も含め難しい。しかし、新田義貞は地元縁のある武人でもあり、控え目に判断するとしても同情的である<sup>19)</sup>。そこから類推するに、新田氏の生き様に心酔していることもまず間違いがない。

この時期の左内の英雄観について簡単にまとめると、具体的な英雄としては太公望と新田義貞が登場する。そして、左内個人の願望の部分において、天下国家のために何かを成し遂げたい、その為に起用されたいとの感情が強く出ている。これについても左内自身が公職に就いているものの、あくまでも藩医の立場であり、直接的に政治に参画しているわけではないという状況が関わっていると考えられる。

## (2) 江戸遊学期

藩医となり二年後、今度は江戸に遊学することになる。江戸では、坪井信良の門に入り、ついで杉田成卿（杉田玄白の孫）や戸塚静海について蘭学を学んだ。漢学は塩谷岩陰に学んでいる。左内の才能を目の当たりにし、杉田成卿は、

能繼我業者必此人矣。(能く我が業を継ぐ者は必ず此の人なり。)

と述べたと伝えられている<sup>20)</sup>。なお安政二年(1855)六月には、藩主・松平慶永から学業上達の褒辞と印籠を賜っており、客観的には高い評価を得ている時期である。

この時期に遺されている漢詩は少ない。しかし、その中に先に述べた周囲からの高い評価とは反対に、むしろ自分の無学さや無能さをうたう詩が見られる。

070「甲寅暮秋十九日書懷」に対する自注

先君子歿既三年、紀也學不益進、聰明亦不及於前時、故作。

(先君子歿して既に三年、紀や学ますます進まず、聡明また前時に及ばず、故に作る。)

等がその代表例となるだろう。

また次の詩では、

071 偶成 偶成

不遂冥鴻翬碧霄	遂はず冥鴻の碧霄を翬するを
儉安一朶學鷓鴣	儉安の一朶 鷓鴣を学ぶ
此中消息與誰語	此中の消息 誰と与にか語らん
只有梅花慰寂寥	只だ有り 梅花の寂寥を慰むる

1句目にて「はるかに高い所を飛ぶオオトリを追って青空を飛ぼうとはせずに」、2句目にて「一枝に一時の安らぎを求めるミソサザイ(小鳥)を真似よう」と、大志を抱かず、身の丈に合った生活を求める、およそ若者らしからぬ後ろ向きな感情が表出する。

このように、やや屈折した感情を抱いている時期ではあるが、その中の一首に以下のものがみられる。

066 大石良雄 大石良雄

君恩山重命毛輕	君恩は山よりも重く 命は毛よりも輕し
興復主家は素情	主家を興復するは 是れ素情なり
己斬大仇臣願遂	己に 大仇を斬り 臣願遂ぐ
恨忤臣輩得忠名	恨むらくは臣輩をして忠名を得しむるを

3句目にて「(赤穂浪士は)すでにかたきの張本人を斬り、家来としての念願を達成したのだから(十分満足しているだろうに)」、4句目にて「君達が忠義者の代表のような評判を得ているのは、残念なことである」と、ある種の不公平感、あるいは単純に不満を抱いている。

ここから、大石良雄を含め赤穂浪士を左内は偉人・英雄と見なしていると考えられる。付け加えるならば、左内自身も、己の忠義の心は、彼らに優るとも劣らないものである、との自負が「恨」の一字にこめられている。先述のように、当時の高名な人物から高評価を得ている左内であるが、どこか鬱屈とした空気がただよう時期である。

## 五 橋本左内における英雄とは

本稿では、左内が抱いていた英雄観を漢詩やその他の資料を用いて、少年時代から蘭学者時代までを検討した。その結果を簡潔にまとめていきたい。

まず少年時代では、漢詩内には英雄に対する言及は見られなかった。個人的に傾倒（敬慕）していたと考えられる人物群（歴史的人物）として、左内の号の由来となった岳飛、『啓発録』内の福島左右衛門大夫、片桐助作、井伊直政、本多忠勝が挙げられる。漢詩における個人的な願望としては、隠居生活への憧れが見られた。ただしこれは全時代に散見されるものでもある。

続く適塾時代では、前の時代と同じく詩中に英雄に対する言及は見られず、隠居生活への憧憬や美しい自然を詠う雅な世界が繰り広げられていた。

漢詩内にて英雄に関連する具体的な記述が出てくるのは蘭学者時代からである。福井在任期は、個人的な願望、すなわち天下国家のために何かを成し遂げたい、その為に起用されたいといった思いに連動して、歴史的人物として太公望が挙がり、また新田義貞を悼む詩が見られた。

同じく蘭学者時代の江戸遊学期では、歴史的人物として忠義者の代表格・大石良雄（赤穂浪士）が出ていた。そこには「私も忠義の心では負けていない」といった張り合う側面もあるのだが、この時期の左内は、己の起用を願うよりは、自分の無学さや無能さを嘆く傾向が強かった。

詩中に登場する歴史的人物に関して、時代的な変化に着目するならば、少年時代から蘭学者時代では、いずれの時代も、太公望を含め武功を挙げた者や忠義者（単に人格的に優れているのではなく、敵討ちという武功を挙げている）といった、やや即物的な功績を挙げた人物となっている。

本稿の最後に、文天祥について少しく述べたい。冒頭にて引用したように、左内は辞世の句（獄中作）にて文天祥の逸話を詠み込む。また左内は、浅見綱斎（山崎闇斎の弟子）の『靖献遺言』を愛読していたことが知られている。『靖献遺言』は、屈平（屈原）・諸葛亮・陶潜（陶淵明）・顔真卿・文天祥・謝枋得・劉因・方孝儒の評伝である。この8人はいずれも忠臣であり、国家存亡の危機に際し悲劇的な最期を遂げたものも存在する。ある意味では英雄伝といっても差し支えない。さらに「正気の歌に和す」でも有名な藤田東湖に、左内は安政二年（1855）6月（江戸遊学期）に会っている。

このように、状況的には大きな影響を受けているはずであり、詩中に頻出してもおかしくはない。しかし、今回の検討対象内の詩では文天祥は出てこなかった。それどころか、この『靖献遺言』にて述べられている人物は、一人も登場しない。この『靖献遺言』と左内の漢詩との関係に関しては、続稿でも目を配っていきたい。

なお、第三章にて述べたとおり、左内の漢詩作品は460種ほど遺されている。その内、今回検討対象としたのは71首である。以降の漢詩についても、周辺資料を含めて継続して検討していきたい。

### 附 記

本稿は、「橋本左内の英雄観（甲）」（第37回東亜漢学研究者之会、2020年7月5日、致理技術学院、コロナ禍のためGoogle Meetにて参加および発表）の一部をもとに大幅に加筆修正したものである。先の発表の際、多くの方々に貴重な御助言を賜った。記して謝意を示したい。

### 注

- 1) 左内の先行研究に関する詳しい記述は、拙著「橋本左内研究史」（『福井県における文献資料の研究／研

究史と目録の作成(幕末篇)』, 福井大学, 2002年。加筆修正し『橋本左内 その漢詩と生涯』, 後述)等を参照されたい。

- 2) 『渡辺崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』(日本思想大系55, 岩波書店, 1971年)
- 3) 拙著『適塾』35～37, 39, 41～48, 50, 53～57号, 大阪大学適塾記念会, 2002～2004, 2006, 2008～2015, 2017, 2020～2025年)。

なお, これまでの一連の著作のうち2015年までのものを中心に加筆修正し『橋本左内／その漢詩と生涯』(台湾・致良出版, 2016年7月)として出版しており, 2018年3月に増補版として, 三重大学出版会から, 日本にて出版した。

本稿では, 底本に『橋本景岳全集』景岳会(景岳会, 1939年。引用は歴史図書社版1976年)を使用する(以降『全集』)。ただし, 字句に関しては『藜園遺草』(玉巖堂, 1870年)等, それらの諸書をあわせて見ている。

なお, 訓読通釈において, 前川幸雄(元・福井大学教授)・藤井正道(元・福井工業高等専門学校教授)両氏による勉強会(1986～1990年分)の成果の一部を用いている(本稿にて引用する場合は「勉強会資料」と表記)。

- 4) 猪口篤志『日本漢詩』(新釈漢文大系45・46, 明治書院, 1947年)。左内の詩は上巻(357-360頁)に収録。なお猪口氏の他の著作を見てみると, 『日本漢詩(新版)』(新書漢文大系7, 明治書院, 2019年。125・126頁)も2首目のみの採録である。『日本漢文学史』(角川書店, 1984年, 468頁)は, 「獄中作」の2首目と1首目(収録順), 165「論文」(『全集』は「論文寄某氏」)を採録している。その他, 松浦友久『漢詩の事典』(大修館書店, 1999年, 271頁)では, 「獄中作」1首目と2首目は抄録, 3首目が全文の採録となっている。

やや例外的と言えるのは, 坂田新『江戸漢詩選』(第4巻「志士」, 岩波書店, 1995年)で, 「獄中作」3首を含め全31首の採録である。

- 5) 獄中作その一「苦冤難洗恨難禁。俯則悲痛仰則吟。昨夜城中霜始隕。誰知松柏後凋心。」(苦冤洗ぎ難く, 恨み禁じ難し。俯せば則ち悲痛, 仰げば則ち吟ず。昨夜城中, 霜始めて隕つ。誰か知る, 松柏後凋の心。)

その二「二十六年如夢過。顧思平昔感滋多。天祥大節嘗心折。土室猶吟正氣歌。」(二十六年, 夢の如く過ぐ。平昔を顧思すれば感滋多し。天祥の大節, 嘗つて心をば折つ。土室猶は吟ず, 正氣の歌。)※「折」に関して, 『全集』の編者は「折」と推測する。今はそれに従う。

その三「欹枕愁人愁夜永。陰風刺骨折三更。皇天憶應憐幽寂。一點星華照牖明。」(枕を欹てて, 愁人夜の永きを愁ふ。陰風骨を刺し三更を折つ。皇天憶ふに心に幽寂を憐むべし, 一点の星華, 牖を照らして明るし。)

- 6) 詳細な伝記に関しては拙著『橋本左内／その漢詩と生涯』(前出), 山口宗之『橋本左内』(人物叢書, 吉川弘文館, 1962年。新装版1985年), 角鹿尚計『橋本左内／人間自ら適用の士有り』(ミネルヴァ日本評伝選, ミネルヴァ書房, 2023年)等を参照されたい。
- 7) 安政五年(1858)十月の家宅捜索を受けた際に137の草稿が紛失したと思い, 記憶によって再度142を作った, と考えられる。
- 8) 山口宗之『全集未収橋本左内関係資料研究』(私家版, 1965年)131-132頁。
- 9) 漢詩の番号は, 先述の「勉強会資料」による。なお, 橋本左内の年齢は数え年(一月一日換算。左内は三月十一日生まれ)である。
- 10) 『全集』では, 漢詩を作成された時代順に排列しているのだが, 該当箇所は混乱が生じている時期であり, 現時点では判断が出来ないため, あくまで445前後とする。詳しくは拙著『橋本左内／その漢詩と生涯』66-68頁を参照されたい。
- 11) 『日本国語大辞典第二版』(小学館, 2003年)
- 12) 松前健「英雄譚の世界的範型と日本文学」(『論究日本文学』44, 立命館大学日本文学会, 1981年)に詳しい。詳細はこちらを参照されたい。
- 13) 王や貴族とは, 本来, 英雄そのもの, または英雄の末裔である。
- 14) 左内の詩は, 時代を見据え前へ前へと進もうとする, いかにも志士然とした意志を感じさせるものもある。しかしその一方で, 悠々自適な隠者の生活に憧れる, そういった詩も散見する。

- 15) 井伊直政（彦根藩の初代藩主）の後裔は、左内の処刑を決めた井伊直弼（彦根藩の第16代藩主）であり、この史実は皮肉以外の何物でもない。なお左内は、この『啓発録』の記述に限らず、戦国時代の著名な武将達に対しては概ね好意的な評価をしている。
- 16) 原本に不明とされる一字を「勉強会資料」は「詩」と補う。これに従う。
- 17) 例えば、適塾時代の書簡に笠原良策（福井藩・蘭方医）とのやりとりが複数遺されており、そこでは西洋の医学書購入に関する内容が記されている。漢詩としては、続く蘭学者時代（江戸遊学期）の詩070「甲寅暮秋十九日書懷（甲寅の暮秋十九日の書懷）」に「寒燈挑盡讀洋文」（寒灯挑げ尽して洋文を読む）の句がある。また同時期の安政二・三年（1855・1856）に「西洋事情書」「蘭書治鉄学の訳文」が遺っている。活動後期の詩134では、マカオの事例（1840年代、アヘン戦争および植民地化）を詠み込む。さらに謹慎期の安政五年（1858）一月上旬の詩に、185～191「西洋雜詠」（7首）、192「題米里幹人情畫」（米里幹人の情画に題す）がある。このことから相当な数の西洋に関する事物に触れていたことが分かる。
- 18) 「齊太公世家第二」『史記』卷32（中華書局、修訂本2014年、1789-1790頁）。
- 19) 新田義貞に関する詩はもう一首（377）遺されており、全55句の長大な詩にて、志半ばに倒れた義貞を弔う内容となっている。  
前川幸雄「橋本左内作「謁新田墓、弔源左將公。」考」（國學院雜誌106-11、2005年。後に『福井縣漢詩文の研究（増補改訂版）』、朋友書店、2019年）に詳しい。
- 20) 松平慶永「橋本左内小傳」（明治八年（1875）撰、『全集』上 前掲 口絵内収載 本文七行目）